

隨感斷片

櫻 榮 都 城 鶴

□ 人生は不可解なり、不可能の連續なり！云ふをやめよ、信仰に生きよ、そはそれらを超越する力を得なければ。

□ つまらない偶像——道祖神等——を私は拜する氣にはなれない、だが私はそれを敬虔に拜して行く人を心から拜する。

□ いやしくも君達が宗教家と自任するなら、道に會つた葬儀に合掌したまへ。そんな事位？——だが私は相當の教養ある人に於いてさへ、それを見受けぬ事がある。

□ なんでもない事がいつもやりにくいんだ。人は生涯人の悪口を云ふ必要を認めぬ。

□ 友が君をうらぎるのではない、君が友を頼りすぎるのだ。

□ 人相がお前を支配するのではない、お前が人相を支配するのだ、人の性を善なりと見た人は善人になる。

□ すべてに習熟せよ、しかしなれてはいけない。

□ 學徒よ、自分の持つ本の半分よんで居たら君は學者だ、たのむからつん讀はよしてくれ。

□學者になれ——だが晴天に高下駄はいて雨傘用意して行く學者にはならない事だ。

□野道の傍の一個の水車！其所にトルストイは人生を見出し、詩人は歌ひ、又あるものはタービンを作つて、見られるものは一ツだが、見るものによつて色々の差別を生ずる。何事にでもだ。

□それが君の生活の糧でなかつたら——歌は下手でも自分を慰めるものであつたらそれでよい。そんな局部が君の人生のすべてを作つて居るものではない。

□求めても與へられなかつた、悶へても慰められなかつた人達に、若し何等かの方法——たゞへば文才でもあれば詩となり小説となつて自分をなぐさめて行くが、それさへも許されぬ人は世に云ふ多くの罪人になつて行く。

□弱いものは決して強者に勝てないが勝たうとして精進するのが努力である。努力するものと、どうせ勝てないのだからとあきらめる二者がある。人生の或る場合には此の二つとも必要である。

□人は無暗に良心の許すものに向つて進めと云ふ——がそれほど人間は間違ひのないものかしら？。

□汝若し生きんとするならば最も強かれ、而らずんば最も弱かれ。

□最も深刻に悩んだ人は最も強い喜びを味ひ得る、釋迦然り、キリスト然り！何でも徹底的にやることだ。（完）